

初等教育指導者養成における音楽劇の指導法と教育的効果

坪井 眞里子・瀬川 高代*

Teaching Method of Music Drama and Its Educational Benefits in Primary Education Leadership Training

Mariko TSUBOI and Takayo SEGAWA*

はじめに

幼稚園、保育園の行事で行われる音楽劇は、演劇、身体表現、言葉、音楽、造形が融合した総合的な表現活動である。お友達とのごっこ遊びや、決まり事のある集団遊びの中で育った役割やルールの理解が、イメージやお話の理解や想像に支えられ、いっそう表現の幅を広げる。劇は全員参加することで一人一人がその役における主役になれることができるものである。幼稚園教育要領において『感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。』¹⁾ その「ねらい」「内容」においても総合的に融合しているのが、まさに音楽劇であることが見てとれる。また領域としての「言葉」「人間関係」とも関わるものである。表現活動においては相手があって初めて成り立つものである。自分以外の他者を意識して自己表現の認識する機会となり得る。教育的にも意義の大きいものである。また初等教育という大きな括りで鑑みたとき、教育の場での劇表現の効果は教科との関連性やコミュニケーション力、表現力、情動的な面からも多大な効果を生み出す。

以上のことをふまえ、本稿では初等教育の指導者養成における劇表現の指導法と教育的効果について、本学幼児保育学専攻2年生を対象に行った授業内容を検証、考察していく。

1 授業展開

劇は表現活動において論理的な意味発表ではなく、誰でも参加できる表現活動である。つまり全員なんらかの形で参加しうるのである。4歳児になると、おままごと、ごっこ遊び、戦隊ごっこなど様々に想像遊びが広がり、現実世界の縮図を子どものまなざしを通して遊びの中で演じることができる。また家庭、社会のルールや人間関係を学ぶことが可能になる。その中において、いつも自分が主役であり、子ども自身を通した目で現実をみている。お話の中においても大人が考える先を見越したストーリーではなく、いろいろな可能性が出てくるものと思われる。また、周りから見られる自分、表現としてどのように見て欲しいか、どう評価されるのか、意識を持つことに繋がる。指導者はそういった子どもの可能性、表現を受容することが大切である。子どもの可能性も考慮しながら、授業の一環として「指導者が子どもに見せる為の

* 非常勤講師

音楽劇」を想定しとりくむ。

平成28年度前期における保育の表現技術Ⅱ(音楽)のクラス授業において、歌・言葉・身体表現・リズムなどの総合的な音楽表現として、音楽劇オペレッタの授業を行った。15回の授業のうち8回の授業をオペレッタの授業にあてることとした。1回から7回目の授業は、次にその内容を記すこととする。(音楽を伴った劇表現をオペレッタとする。今後オペレッタと記する。)

1-1 うたとリズム活動

(1) 1回目から4回目の授業-弾き歌い課題

前期の授業ではグループレッスンで弾き歌いから取り組む。その為授業では課題の10曲について、曲の特徴、留意点の確認を行う。1年生で履修した声楽の歌い方の基本、立ち方、姿勢、腹式呼吸について確認を行う。課題10曲について、ア・カペラで小テストを行う。課題は次の通りである。

「アイアイ」「いぬのおまわりさん」「おかえりのうた」「おなかのへるうた」
 「おもちゃのチャチャチャ」「てのひらをたいように」「はしれ ちょうとつきゅう」
 「ふしぎなポケット」「まつぼっくり」「もみじ」 (五十音順)

(2) 5回目から7回目の授業-リズム遊び

楽器を使ってリズム遊びを行う。楽器に関する正しい使い方を学ぶ。

「てのひらをたいように」に合わせてリズム打ちをする。3人のグループごとに発表を行う。

リズム遊び3回目の授業で発表しそれぞれの工夫した点について記述する。

使用楽器 鈴、カスタネット、タンバリン、ウッドブロック等

使用楽譜 楽しいボディパーカッション2 山ちゃんのリズムスクールより p.46

表1 前期クラス授業計画〈楽器、劇を取り入れた音楽表現〉

	課題	内容
4/14	オリエンテーション いぬのおまわりさん てのひらをたいように、はしれちょうとつきゅう	姿勢、腹式呼吸、共鳴、発声に関して 復習 弾き歌い課題曲の確認
4/21	弾き歌い課題曲 おもちゃのチャチャチャ、もみじ アイアイ、おなかのへるうた	発声の基本を確認 弾き歌い課題曲-留意点の理解
4/28	弾き歌い課題曲 まつぼっくり、ふしぎなポケット おかえりのうた 試験曲の練習	発声の基本を確認 弾き歌い課題曲-留意点の理解
5/12	小テスト(弾き歌い課題曲の確認) グループ分け	暗譜、ア・カペラで課題曲のテスト 楽器を使うグループ分け、役割を分担
5/19	楽器を使う、リズム練習 カスタネット、鈴、タンバリン等を使い、曲を仕上げる	「てのひらをたいように」、の曲につけて歌いながら楽器を演奏
5/26	楽器を使う、リズム練習「てのひらをたいように」 正確にリズムをしっかりと感じる	リズムの変化をしっかりと身に付ける。 身体でリズムを楽しむ
6/2	楽器を使う、リズム練習「てのひらをたいように」 グループ発表(リズムの変化を感じる)	グループ発表 オペレッタグループ分け
6/9	オペレッタ1「3匹やぎのガラガラドン」 音の確認、台詞の確認、演技の基礎1、	全体練習(音の確認)舞台での演技基礎知識

6/16	オペレッタ2「3匹やぎのガラガラドン」 音の確認、台詞の確認、演技の基礎2	全体練習（音の確認）舞台での演技基礎知識
6/23	オペレッタ3「3匹やぎのガラガラドン」 歌の表現 台詞、場面設定について	役を理解し、表現方法を工夫する グループで立ち位置、場面転換確認
6/30	オペレッタ4「3匹やぎのガラガラドン」 音楽練習、立ち稽古	役を理解し、表現方法を工夫する グループで立ち位置、相互関係を把握
7/7	オペレッタ5「3匹やぎのガラガラドン」 音楽練習 立ち稽古	発表にむけてそれぞれの演技、歌、表現について確認する
7/14	オペレッタ6「3匹やぎのガラガラドン」 通し稽古	発表にむけてそれぞれの演技、歌、表現について確認する 客観性をもつ
7/21	オペレッタ7「3匹やぎのガラガラドン」 グループ発表	グループ発表について感想、意見を交換する
7/28	オペレッタ8 身体をつかって表現しよう グループ発表 アンケート調査	今後の課題について、それぞれが認識する

1-2 オペレッタ

オペレッタを授業の8回から15回目に行う。（14、15回は発表）

教材 『3匹やぎのガラガラドン』川並知子作詞 小谷肇作曲（年長—低学年用）

キャスト 小やぎ・中やぎ・大やぎ・トロール・ナレーター

参考図書 『三びきのやぎのガラガラドン』マーシャ・ブラウン絵/瀬田貞二訳
（ノルウェー昔話）福音館書店

方法 4人～6人のグループを作り、配役を決める。

以下の事を留意事項として伝える。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> ① 劇表現において重要なのは、お話の上での役の扱いをしっかりと理解すること、その上で役の気持ちに添った演技、表現を考えること。 ② 舞台の基本的な決まり事を理解するとともに、身近な素材をつかって効果的な演出ができるよう舞台装置を考える。 ③ 客観的な視点から全体の構成や演出をグループで考察、実践する。 ④ 台詞、歌唱については、観客に理解できるよう、日本語の発音の方法（舞台語発音）にも留意すること。 ⑤ わかり易くする為に大きな動作を心がけ、設定においても舞台を大きく使う工夫をする。 |
|--|

以上のことを全体的な注意事項として提示する。次に1～6回目の授業の指導法を示す。

（オペレッタ授業1）

- ・各曲の音とり、全体のあらすじと曲の流れを把握する。
- ・全員で全てのパートを歌い、自分の役以外の箇所も理解する。
- ・必要に応じて絵本をもう一度読む。
- ・ナレーションについても棒読みにならないように注意する。読み聞かせのようにわかり易く話す。

（オペレッタ授業2）

- ・1の授業でのことをふまえて、暗譜できるように音とりをする。
- ・グループで基本的な立ち位置や、役のかかわりについて把握、決定していく。

・役の心情を理解し歌い方や、表現の仕方を考える。単純な振り付けにならないように留意する。
(オペレッタ授業3)

・それぞれの歌の暗譜をする。小やぎの歌、中やぎの歌、大やぎの歌、トロルの歌、かけあいの歌。

・立ち位置や動きの確認。三匹やぎの登場の場面、かけあいの歌でのトロルの位置関係やトロルと大やぎの戦いの場面などについて特に注意する。

・グループごとに問題点や課題を提示していく。

・基本的な動作ができていないか確認をしながら、全体を通してみる。

(オペレッタ授業4)

・表1にそれぞれの気持ちを場面ごとに書き込んでいく。書き込むことにより縦にみると気持ちの流れが理解できる。

・全体的な流れを通して、登場人物の気持ちを読みとることができるか、客観的にグループで確認する。舞台上に立っている時には、必ず存在の意味が分かるように留意する。

・それぞれ一人で歌う場面の表現方法について、気持ちに沿った演技になっているか確認を行う。(わかり易い演技であるか。)

(オペレッタ授業5)

・音楽的な記号の確認アクセントやクレッシェンド、レガート等、音楽的な歌い方の確認をする。

・動作について、流れてしまっていないか確認。(動作を止めることにより、効果的になる)

・グループごとにトロルとのかげあいの場面を全員の前で試演し、意見交換をする。

・場面の展開についてスムーズに行われているか、流れは自然であるかを確認する。

(オペレッタ授業6)

・発表に備えて、通し稽古を行う。

・立ち位置や動きの確認。ナレーションについても話すスピード、表情の確認。

・音楽的な確認。(それぞれのソロ、かけあい、全員での斉唱)

・人物設定についての確認、キャラクターについての共通理解。

・お互いの演技、歌を聴きあい意見交換を行う。

(オペレッタ授業7, 8)

・グループ発表を行う。舞台設定を説明する。

・それぞれ役の工夫したところ、見どころについて書いた用紙を提出する。

・登場人物の気持ちの流れについての用紙の提出。(図1)

・それぞれの発表をみて意見交換を行う。

・発表を終了したグループからアンケート(図2)を行う。

2 オペレッタ「三匹やぎのがらがらどん」の発表に関するアンケートの実施と結果

実施日 平成28年7月28日 オペレッタのグループ発表後

実施対象 保育の表現技術Ⅱ(音楽)の履修者 出席数158、回答数158

回答率100%

・アンケートの内容は図2の通りである。

・回収したアンケートにはランダムに1~158の番号を割りふる。

・設問8、9、10、11、13についての回答例はこの番号で示すものとする。

登場人物の気持ちの流れ

場面	のりこ	響く	のりこ	のりこ	のりこ
1 幕開きの場面					
2 幕開きの場面					
3 幕開きの場面					
4 幕開きの場面					
5 幕開きの場面					
6 幕開きの場面					
7 幕開きの場面					
8 幕開きの場面					
9 幕開きの場面					
10 幕開きの場面					
11 幕開きの場面					
12 幕開きの場面					
13 幕開きの場面					
14 幕開きの場面					
15 幕開きの場面					
16 幕開きの場面					
17 幕開きの場面					
18 幕開きの場面					
19 幕開きの場面					
20 幕開きの場面					

図1 登場人物の気持ちの流れ

調査の結果(アンケート調査)

1. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

2. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

3. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

4. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

5. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

6. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

7. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

8. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

9. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

10. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

11. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

12. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

13. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

14. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

15. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

16. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

17. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

18. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

19. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

20. どのくらい練習を繰り返すのか? ()

図2 アンケート調査

設問1 これまでに演劇やオペレッタの経験はありますか？

表2 演劇・オペレッタなどの舞台経験

ある	87人 (55%)	ない	71人 (45%)
----	-----------	----	-----------

まず演劇やオペレッタなどの舞台経験の設問には、約半数の学生は何らかのかたちで舞台経験があることがわかった(表2)。学生の中にはダンスやミュージカルや演劇のレッスンを受け、ホールなどで発表した経験を持つ者もいるようであった。しかし、学生によってはこれまでの学校などでの授業の経験も入れて「ある」と答えた学生も含まれており、舞台経験の種類や質には差があると推測できる。

設問2 上手、下手はわかりますか？

表3 上手・下手の理解

わかる	108人 (68%)	わからない	44人 (28%)
		無回答	6人 (4%)

設問3 舞台用語について

上手はア、イ、ウのうちどこですか？

下手はア、イ、ウのうちどこですか？

板付きというのはどういうことですか？

- ① 幕が開いたときに登場すること
- ② 幕が開いたときに舞台にいて演技を始めること



表4 舞台用語について その1

	正解	不正解	無回答
上手について	99人 (63%)	52人 (33%)	7人 (4%)
下手について	102人 (65%)	49人 (31%)	7人 (4%)
板付き	101人 (64%)	42人 (27%)	15人 (9%)

表5 舞台用語について その2

	正解	不正解	無回答
全3問	64人 (41%)	15人 (9%)	5人 (3%)

設問2と設問3は、学生の基本的な舞台用語についての理解度を調べた。「上手」と「下手」を理解していると答えた学生は108人(68%)と約7割であった(表3)。次に設問3で舞台図を見て「上手はア、イ、ウのうちどこですか?」「下手はア、イ、ウのうちどこですか?」「板付きというのはどういうことですか?」との質問に対する回答を見ると、どの質問も6割以上の学生が正しく理解できている結果となった(表4)。3問全問正解者は64人(41%)という結果から、学生はほぼ理解できていたと推測できる(表5)。

演技について (図3)

設問4 演技をするときに客席からの視線を意識して演じることができましたか?

設問5 音楽を大切に演じることができましたか?

設問6 相手の歌やことばを感じて演じることができましたか?

設問4「演技をするときに客席からの視線を意識して演じることができましたか?」では、①とてもよくできた13人(8%)②できた79人(50%)③まあまあできた61人(39%)④できなかった4人(3%)という結果が出た。設問5「音楽を大切に演じることができましたか?」では、①とてもよくできた22人(14%)②できた74人(47%)③まあまあできた59人(37%)

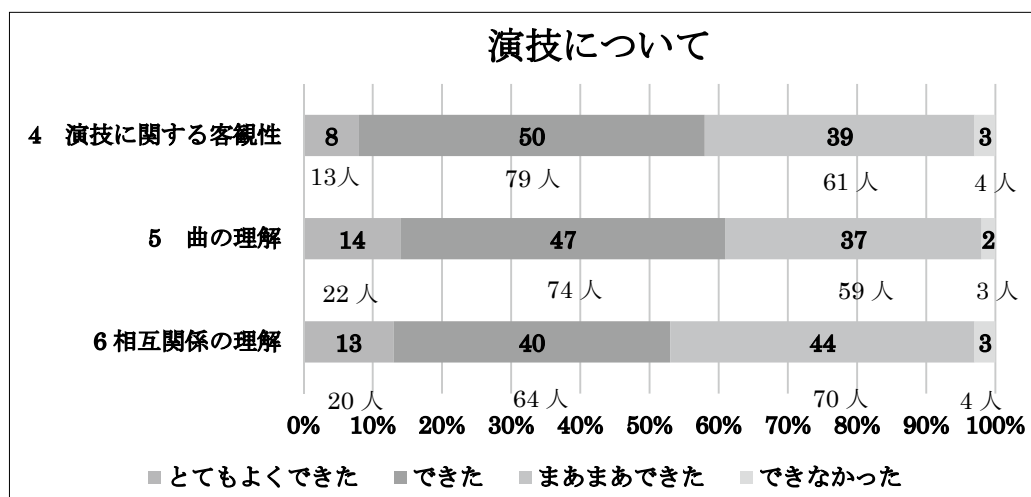


図3 演技について

④できなかった3人(2%)という結果で84%の学生が「できた」と回答している。設問6「相手の歌やことばを感じて演じることができましたか?」では、①とてもよくできた20人(13%) ②できた64人(40%) ③まあまあできた70人(44%) ④できなかった4人(3%)という結果が出た。これら3つの設問結果から、①とてもよくできた、②できた、と答えた学生は半数以上であり、①②③の学生を合計すると、97%の学生が満足した演技ができたと感じていることがわかる。主観的な感想であるが、学生の演技に対する姿勢も読み取れる。概ね積極的に取り組んだと推測できる。

設問7 『三匹やぎのがらがらどん』のお話を知っていましたか

設問7では、①知っていた84人(53%) ②なんとなく知っていた49人(31%) ③知らなかった25人(16%)という結果から、この話について概ね知っており、イメージを作り易い状況にあると判断する。(図4)。このお話は保育園や幼稚園でも取り上げられる機会の多い題材である。

よく知っていると答えた学生の多くは、幼少期にこの話を絵本で知っていたようであり、中には好きなお話として何度も親しんだ学生もいた。授業の中でもう一度絵本を読んで、お話を確認する様子も多数みられた。

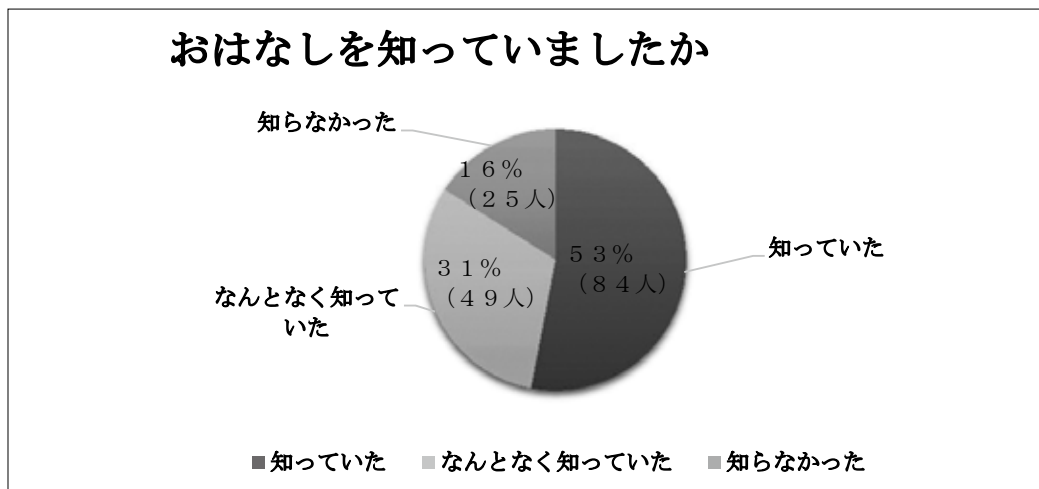


図4 お話について

設問8 自分の役で特に工夫したところを教えてください。どのように工夫したか具体的に書いてください。

設問8は自由記述なので、その代表的なものを書き出す。(番号については先に記したようにランダムに打ったものである。以下の記述式の設問結果は同様に記すものとする)

[3 同じ振りにならないようにトロルの恐ろしさを見ている人に伝わるようにした(トロル)。4 小さいやぎなので弱い感じ(小やぎ)。5 魔物なので怖そうな感じをだした(トロル)。7 気が弱く見えるように演じた(小やぎ)。9 こわさと自信があるのをだした(トロル)。14 服の色と声の低さ(トロル)。17 小やぎだから声を少し小さくして弱さを出したが、どこか強い感じで演じた(小やぎ)。18 大きな振りと大きな声、こわい動きをするのを工夫した(トロル)。19 大きな声で歌うことで迫力を出せるようにした(トロル)。23 歩く時の足踏みを強く見えるよ

うにした。振りも他のやぎよりも大きくした (大やぎ)。24はっきりした声を出すようにした (トル)。29ちびやぎよりも強い意志をもってトルに少しだけ立ち向かおうとした (中やぎ)。31できるだけ前を向いて演じるころ (トル)。35とにかく堂々と、3匹のお兄さんらしくしっかり演じた (大やぎ)。37中やぎらしく、真ん中のお兄ちゃんらしく、少ししっかりして見えるように演じた (中やぎ)。41食べたい気持ちを伝える (トル)。46できるだけ堂々とする (トル)。47大きいやぎなので、ゆったりとした動きを工夫した (大やぎ)。50強くみえるように大きな動作で演じた (大やぎ)。53いかに大きく振りをつけて、言葉を表現するかに気付けた (中やぎ)。55堂々と歌い演じる (トル)。58体が大きく見えるようにした (大やぎ)。61戦うシーンで強くてイジワルそうに演じる (トル)。62中くらいということ一番難しいポジションだったため、主張せず、でも元気に (中やぎ)。64振りで言葉以外の表現をした。セリフのないところも演技をした (トル)。73戦うときに一生懸命に動いた (トル)。80お面を作った (大やぎ)。84トルに自信満々に挑むために手をびしっと伸ばして挑発した (大やぎ)。86大きな動きができるように、せりふに合わせて考えた。「力」という歌詞のところは体全体で「力」を表現した (小やぎ)。95笑顔で元気がよいところと、怖がるころのメリハリに気付けた (中やぎ)。97小さいやぎなので小柄なことを表現した (小やぎ)。98言葉の意味が分かるように振り付けを大きく表現すること (中やぎ)。102小やぎだからといって動作を小さくしすぎないこと (小やぎ)。104声を低くトルっぽくしたところ (トル)。108トルとかけ合いをするころ。舞台を大きく使って振り付けて移動した (小やぎ)。110大きいやぎを表現するために手を大きく広げたこと (大やぎ)。111楽しそうに、でもトルには食べられないように必死で願うころが観客に伝わるように (中やぎ)。113いばってるようにした (トル)。114軽快に動くこと (小やぎ)。121舞台を大きく使う (小やぎ)。122偉大さをみせる (大やぎ)。125動きを大きくした。少しりりしい表情を意識した (中やぎ)。1282人でトルをやったので、2人でしかできない振り付けをした (トル)。131可愛い感じになるように工夫をした (小やぎ)。135中くらいのやぎをやんちゃな感じに設定にしたので、やんちゃなしぐさを考えたころ (中やぎ)。147中やぎらしさを出すために、大やぎよりも気弱な感じをだした (中やぎ)。148小やぎなので元気よく、トルにおびえているところを工夫した (小やぎ)。154いばった感じをだした。大きく強そうに、ガニマタで演じた (大やぎ)。157気持ちの表現を大げさに大きく動いた (小やぎ)。158歌を歌うとき、可愛らしくではなく、低く怖く歌った (トル)。

回収した158人のうち、153人がこの設問に対して記述していることから、ほとんどの学生は自分の役に対して関心を持ち、演技に対して工夫を試みたことがわかる。

設問9 演じた前と後で気持ちの変化はありましたか？

オペレッタを演じる前と、演じた後での気持ちに変化があったかどうかの設問では、①気持ちに変化があった105人 (67%)、②気持ちの変化はなかった51人 (32%) という結果となった (表6)。

表6 演じた前後での気持ちの変化

気持ちの変化があった	気持ちの変化はなかった	無回答
105人 (67%)	51人 (32%)	2人 (1%)

7割近い学生がこのオペレッタを演じたことで気持ちの変化を感じていることがわかる。また、「気持ちの変化があった場合、具体的に記述してください。」との設問では、①あった、と答えた学生105人のうち100人の記述があった。

[1最初は緊張していたけど楽しかった。2こわいトロールが好きになった(トロール)。5みんなでやりきった感じ。7振り付けで、どう演じたら分かりやすいかと思えることができた。8もっと練習して、トロールになりきれようになりたいと思った(トロール)。11うまくできるか考えていたが、演じた後はうまくとか成功することよりも、表現をアドリブでもよいかからしっかりできるかを考えていた。14次に恥ずかしがらずできそうだ。18とても緊張して声ができなかった。19もっと頑張ればよかった。23恥ずかしさより楽しさが大きくなった。25人前で歌や演技をする自信がついた。27恥ずかしがらずに、自分が楽しそうにやるとお客さんも楽しく見てくれる。35むずかしさを実感した。36もっと客席が見ることができたかなと思った。42お話を知ったうえで演じたので役の気持ちになりきれた。52恥ずかしくて、なかなか思い通りにできなかったので、次は恥ずかしがらずに楽しくやりたいと思うようになった。54表現の仕方の考えが変わった。55少しだけ人前に出ることに慣れた。64トロールへの考え方が変わった。72トロールの性格などが、まだ分かってないので考えると面白い(トロール)。81役になりきって、協力しようという気持ちになった。101表現することが大切ということ。103より深く気持ちを考えようと思った。107もっとみんなとやりたいと思った。120ひとつの作品を皆で作り上げる。121達成感と、またやりたい気持ちになった134よりトロールの気持ちを理解して演じることができた(トロール)。135もっとはきはきやった方がいいなと感じた。]

記述の中からオペレッタの発表後、学生がそれぞれ次への課題を見出していることがわかる。また表現することへの難しさや取り組む姿勢について、認識できた学生が多いことも読み取れる。

設問10 このオペレッタの好きな場面があれば書いてください。(できれば理由も)

設問10では、125人(79%)の学生の記述があった(表7)。最も多かった場面は「トロールと大やぎの戦いの場面」49人であった。11戦うところ。みんな違って楽しかった(大やぎ)。52大やぎとトロールの戦う場面。ハラハラして楽しいから(中やぎ)。65戦うシーン。工夫すればするほどカッコよくなると思うから(小やぎ)。139戦闘シーン。一番の見せ場で頑張ったところだから(トロール)。次に多かったのは「おしまいのうた」32人であった。1最後のみんなのうた。みんな仲良しになって踊れたから(中やぎ)。三匹やぎが仲良く歌う「三匹やぎの登場」が好きだと答えた学生は23人だった。237「ぼくたち三匹やぎのがらがらどん」のところ。みんな違って見えて面白かった(小やぎ)。84一番最初のやぎ達の歌。とても仲良さそうで

表7 好きなシーン

好きなシーン	
三匹やぎの登場	23人
カタコトのうた	2人
トロールのうた	1人
トロールとやぎのかけ合い	22人
戦いの場面	49人
おしまいのうた	32人

歌うのも聞くのも、楽しくてわくわくするから(大やぎ)。「トロールとやぎのかけ合い」が好きだと答えた学生は22人だった。17トロールとの掛け合い。トロールの強さと一生懸命戦おうとしているところが良かった(小やぎ)。38やぎたちを食べようとする場面。動きの工夫を頑張ったから(トロール)。100トロールとやぎのシーン。トロールをだませるのが面白い(トロール)。

自分が頑張った場面を挙げた学生は多かった。また、自分は登場していない場面を好きな場面として感想を書いた学生も多かった。中には複数の場面を記述した学生も幾人かいた。記述が約8割と高い結果から、多くの学生が、この作品に愛情をもって取り組んだことがわかる。

設問11 表現の上で自分なりの再発見はありましたか？

表現の上での再発見

あった	94人 (60%)
なかった	59人 (37%)
無回答	5人 (3%)

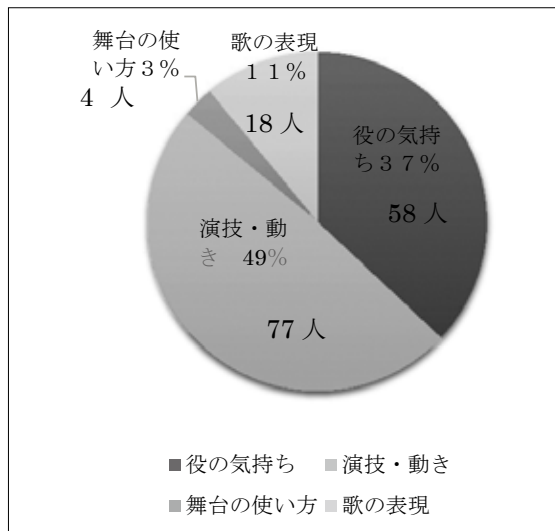
設問11では、①表現の上で自分なりの再発見があったと答えた学生は94人(60%)であった。

[1しっかり大きく動くことで、みんな(客席)からの反応などがあり、伝わったと思った。10客席の方を向くということ。12顔の表情も大切だと思った。17歌の楽しさ、

演じる楽しさ。19堂々とするのが大切。35客席をもっと意識すること。36もっと歌の工夫をしたいと思った。50表現することは難しい。60客席を意識すること。65身振り手振りは大きくする。69自分だけで演じるのではなく、客席の人がいてのオペレッタだと思った。86自分で思っていたのと、見ていたのでは違う。88ダンスとの共通点があった。89思ったよりもっと大きく動かないといけないと気づいた。100人によって表現の仕方は違うと分かった。102大きく見せた方が伝わる。109視線を上にしただけで声の質が変わった。110演技を大きくした方が見栄えがいいこと。111大きく動いて、腕を伸ばすときれいに見えると思った。115もっと舞台を大きく使うと見栄えがいい。131舞台を大きく使わないといけない。149舞台の真ん中で演技をする難しさ。154どうやったら大きく見せられるかという方法。157動きの変化と声の大きさを変えてみるとイメージが変わるところ。]

このオペレッタの授業を通して、「表現する」ということはどういうことか、音楽、演技、気持ちの表現方法など、多面的に改めて考えることができた判断する。

設問12 今後子どもに指導するときに、あなたが最も気を付けることは何ですか？(1つだけ選択してください)



設問12は、幼稚園、保育園で指導する立場になった場合、子供たちに最も伝えたいことを答えてもらった(図5)。結果は、①役の気持ち58人(37%)②演技や動き77人(49%)、③舞台の使い方4人(3%)、④歌の表現18人(11%)となり、⑤その他(61堂々とやる!)と答えた学生も1人いた。ほかの設問には答えていない学生も、この設問には答えており、回収者全員から回答を得ることができた。将来、子供たちの表現活動をどのように指導すべきかを、学生はみな何らかの考えを持って取り組んだといえる。

図5 実践での留意点

設問13 この授業について何かあれば自由に書いてください。

[2オペレッタ準備期間をがもう少しほしい。4とても楽しかった。7グループ別の時間をもっととってほしかった。18役に入り込んでやることは難しかった。25オペレッタは、最初は嫌だったけれど、最終的に楽しかった。29班での練習時間をもっとほしかった。注意する点は何回も聞いたから分かっていた。30もっとオペレッタをやりたかった。33大変だったが楽しかった。演劇やりたい。64上手い下手より何より楽しむことが大切だと感じた。83表現が恥ずかしくて苦手なので、克服したいと思った。ありがとうございます。84表現するのは楽しいと思った。100表現することの楽しさを感じることができた。141良い緊張感の中でできた。それぞれのやぎの特徴が出て面白かった。154最初は難しさなどがありました。振りなどが決まってくると楽しかった。]

学生のほとんどがオペレッタに初めて取り組むということもあり、最初は不安などを感じて授業に消極的な学生も見受けられた。しかし、グループに分かれて役を決め、物語や役について考え話し合い、動きや演技を付け授業を進めていくにしたがって、積極的に取り組んでいったように感じた。結果、発表後の感想では、達成感や充実感を感じたと答えた学生がとても多かった。もっと時間をかけて良いものを作りたい、といったような積極的な意見も多かった。

3 総合的な考察

アンケート実施の結果から、音楽的な表現として考察してみる。まず授業の始めに行った弾き歌い課題曲について、独唱(伴奏なし)で歌うことに消極的で、表現という域まで達しない学生が何人かみうけられた。独唱の小テストの評価から鑑みても、リズム遊びやオペレッタではグループでの共同作業となり、個人的な要素よりもグループの一員としての学びが「恥ずかしい不安」といった気持ちを克服している。演じた後の気持ちの変化に関して、気持ちの変化があったと答えた学生は67%と高い割合になっている。自分自身でわからなくても、グループ内で相談しあうことにより、気づくことができる。役作りにおいてもいかに演じるか、相互関係の理解でも半数以上の学生ができたと答えている。歌う主体は自分であるが、役の気持ちや全体での役割もおのずと見えてくる。練習を繰り返すことにより、声を出して表現していくことが楽しいと感じられるようになる。またグループでの連携が学生を積極的に授業に関わらせる姿勢を生み出している。

表現としての観点では、自分なりの再発見があったと答えた学生が60%である。この設問で舞台と自分自身の距離感や、役作り、演技の客観性の気づきが多く記述されている。記述されていることを一部書くと「顔の表情」「大きな演技」「舞台を大きく使う」「堂々とした態度」「手足を大きく使う」などが挙げられる。劇は観客がいて成り立ち、演じる者はそれぞれの役の気持ちを主体として受けとめ、演じるときには客観的視野が必要となる。そう言った意味においても、効果は大きいと考える。

また指導者として考えた場合、設問12(子どもに指導する際の大切にすること)でその多くが「演技・動き」「役の気持ち」と答えている。「歌の表現」はわずかに11%であった。歌のみよりも総合的な表現力を大切に考える傾向となっている。役を媒体に身体表現のすることの面白さ、楽しさを伝えたいという主旨が覗える。各々が何らかの指導の糸口を見つけたと考える。

劇表現における知識としては指導者として十分知っておく必要がある。オペレッタなど舞台経験については、ほぼ半数の学生が経験している。設問1～3の全3問正解は63%と半数以上

の学生が知識として理解している。しかしながら、客観的な視野で舞台を設定、演じるということに関しての「わかる」ということと「できる」は別に考えるべきで、実際の演技から考えると、まだ演習を進める余地を残している。

授業についての自由記述（設問13）については、オペレッタの課題について始めは消極的な取り組みであったが、表現することの難しさや不安を克服していきたいという声も多く書かれていた。授業内での練習時間が足りないという意見もあるが、演習授業であるので、授業外での打ち合わせや練習も必要である。

音楽としての表現、演劇としての要素、これらの総合的な位置に置かれるのがオペレッタである。想像力を広げ、グループでイメージを共有し、具体的な設定を考える。発表としての音楽劇を考える時、それは単なる遊びの延長ではなく、そこに指導者の意図が組まれる。音声や言葉、身体の動きを用いて、相手（観客）に訴えようとする積極的で創造的な姿勢、態度が必要である。

指導者としてクラスの子ども達、児童に話しをするとき、ただ、言葉を並べても伝わらない。年齢が低いほど、意図するところをしっかりと持ち、わかりやすく抑揚をつけて話す必要がある。絵本の読み聞かせにおいても、劇的な表現は必要である。そういったスキルの一つとしても、音楽をともなった劇表現の授業は有効であり、オペレッタの授業を通して、学生の表現する可能性、能動的な姿勢を見出せたことは大変効果があったと考える。

おわりに

小学校の学芸会で学年や、クラスで演劇や音楽発表をするという場合も多くみられる。劇、音楽は想像力を働かせて自分とは別のものを演じる。それと同時に様々な配役を分担する共同作業で一つの演劇、演奏が生まれる。何かを生み出すこと、創造することは教育現場において個の大切さの再認識すること、また個と全体の関連の大切さを学習できる場である。そういった場を幼稚園、保育園、小学校で持つことは子ども、園児、児童の成長において、小さな社会的な縮図を感じる場ともなり重要な機会であると考えられる。友人とのかかわり、または指導者との関わり、クラスとしてのコミュニケーション力を生み出す場ともなる。本論では、年長 - 低学年での題材を取り上げたが、初等教育という大きな括りでも、国語、音楽、体育、道徳などの教科とも関連付けられ、教育的意義は大きいと考える。

就学前に劇表現としての表現活動を取り入れることは、遊びとして成長の幅を広げるということにつながる。幼児期において劇表現について考えた時、遊びの中で子どもが、ぬいぐるみや怪獣のおもちゃを使って「ガオー、ドシーン」と言いながら遊ぶ。また3歳くらいになるとお父さん役やお母さん役が現れ「ままごと遊び」する。前者は「象徴遊び」後者は「ごっこ遊び」で劇表現にあたるものである。しぐさや動作、特徴をとらえて真似をすることから始まる。「怪獣遊び」や「ままごと遊び」にも小さな社会があり、その中で模倣、順応、同化、変化させていくという遊びの中で育つ。劇遊びは遊びの総合とあると考える。身体的自由表現、お話の広がりや具体化、音楽をともなったダンスや歌などがそれに含まれた時、それは「劇」になる。ある意味子どもの発達の上で、劇的な表現は自然と内在している。保育園や幼稚園で行われる「劇」は総合的な指導となる。それは、子ども達の劇遊びの延長にそれは位置付けられる。大人が考えた「筋書き通り」では遊びにならない。できれば、発表にむけた練習の中に想像力

を広げる遊びの要素を寛容できれば、こんな楽しい遊びはないであろう。そういった意味で指導者を志す者は、劇的表現の多様な可能性を認識する必要があると考える。学生の表現活動の幅を広げること、それは受動的なものではなく、積極的に自発的、解放的なものでさえある。またグループという小さな社会の中で相互作用も関わってくる。個性を重んじながら積極的な学びが必要となる。

保育の表現技術Ⅱ（音楽）の授業において、今年度初めてオペレッタの授業を組み込んだ。これまでは、4年生の音楽演習後期に2つの演目に取り組むこととしていた。しかし2年生の段階で課題とすることで、大きな変化、進歩があった。

前期始めに弾き歌い課題10曲ア・カペラでの小テストを行った。声楽的な歌唱の観点ではなく、表現として捉え、曲の特徴をふまえた上で、1人で暗譜し全員の前で歌う。この段階では表現することに消極的な学生もみうけられた。ア・カペラで歌うということは、まず音程に不安を感じる学生もあり、1人に全体の注目が集まるということを得不得とを感じる。しかしそういった学生がオペレッタの発表時には、それぞれの役を表情豊かに歌い演じるようになった。完成度という点ではもちろん課題があるが、オペレッタを総合的な表現として認識し、その表現は自発的な取り組みへと転じた。

授業の形態が、課題曲を1人で歌うことから、3人のリズム遊び、4～6人のオペレッタという様に取り組む人数、グループを変化させたことにより、学生の授業に取り組む姿勢が能動的になったと解釈できる。アクティブラーニングの効果である。

今回オペレッタという劇表現による授業において、表現力を養う一端としての教育的効果は予想よりも大きかった。お話の内容を思考することで感受性や観察力が高まり、歌や言葉への積極的な態度、グループでの役割分担と共通意識による客観的なかわりが能動的な授業の取り組みへと繋がった。

今後も、総合的な表現活動として劇表現オペレッタにとりくみ、初等教育の指導者養成における、指導法と教育的効果について、引き続き研究を進めたい。

注

1) 文部科学省『幼稚園教育要領』表現（平成22年）

参考文献

- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』（平成20年）
文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社（平成20年）
山田俊之『楽しいボディパーカッション2』山ちゃんのリズムスクール音楽之友社（2009）
マーシャ・ブラウンエ/瀬田貞二訳『三びきのやぎのがらがらどん』福音館書店（2016）
田川幸三、兵庫保問研『劇づくりで育つ子どもたち』かもがわ出版（2010）
片岡徳雄『劇表現を教育に生かす』玉川大学出版部（1982）
柴田礼子『たのしい音遊び』音楽之友社（2009）
古市久子『保育者養成のためのテキスト 身体表現』北大路書房（2001）
伊集院俊隆『絵本・劇・あそび 乳幼児の文学』新読書社（1993）

